

難波西鶴と

海の道

【23】

森田 雅也

引き続き、西鶴『日本永代蔵』元禄元(1688)年刊「巻」の五「舟人馬かた鐘屋の庭」の酒田の豪商「鐘屋」の様子です。

「十人よれば十國の客、難波津の人あれば、播州網干の人もあり。山城の伏見衆、京・大津・仙台・江戸の人、入りまじりての世間咄し、こづれを聞きても皆かしこく、その一分を代りかかねる

は独りもなし」

山形県の北部、日本海に面する酒田は、最上川の川運を利用した庄内米の大集散地でありました。寛文12(1672)年、河村瑞軒が貯米蔵を設け、大坂へ送る西回り航路を開いてからは、東北一の寄港地となっていました。その酒田が舞台となつて、西鶴の浮世草子に描かれていることは、今回までに繰り返し述べてきたことで

商人知る貴重な学習の場

大問屋「鐘屋」には、日本の物流の要ともいえる筋金入りの営業マンが諸国から大集合しています。「難波津の人」は、もちろん大坂難波の米商人。「好色一代男」世之介が米商人という設定で酒田に

来ていたことも書きましたね。『播磨の網干衆』は播州米を商う姫路の米穀商です。掛保川水系の積出港として海路の網干港を有していましたので、大商人が多かったです。ちなみに西鶴の頃より少し後の世になると、酒田には本間家という大商人が現れますが、初代は播磨の網干で修行しています。何か、米所同士のビジネス上の深いきずな

があったのでしょうね。江戶初期に大坂に移住し、難波商人のルーツの一つとなったことは有名ですが、江戸時代を通じて、近江商人のよう

に敏腕ビジネススマンとして活躍しました。そして、「京・大津・仙台・江戸」のビジネスマン。皆が入り交じっての情報交換。誰もがその情報を生かしているというのです。その商人たちは、「年寄りたる手代は、我ためになる事をしておくれ。若手手代は、悪所づかひ仕過(こ)し、とかく親かたに徳をつけず。是をおもふに、速

国へ商ひにつかひぬる手代は、律義なる者はよろしからず。何事をもちほにかまへて、人の跡につきて利を得る事かたし。又、大氣にして主人に損かけぬる程の者は、よき商賈をもして、取り過ぎの引き負けをも埋まる事はやし」なのです。ベテラン手代は独立後を考え、若手の手代は主人に損失で迷惑をかけるが、遊び人もいるが投機的な商売をやつてのけるものもいるというのです。皆したたかです。海千山千のビジネススマンが集まる鐘屋の実態は、当時の日本の商人を知る貴重な学習の場であったといえますね。

(関西学院大学文学部文学言語学教授)

海千山千の商売人集った「鐘屋」